

# 幼児歌曲の伴奏に関する一考察

( 1 )

杉 山 知 子

## I. はじめに

音楽が人間の技術行為を媒体として生まれるものであるため、その技術獲得にエネルギーが費やされるのは当然のことである。この技術獲得のための練習が、技術ばかりでなく精神をも練磨し、それゆえ、音楽が人間形成の上で重大な役割を果たすのであるが、この精神を練磨していくはずの音楽技術獲得が、逆に知性や感情を失わせるという矛盾も古来より気づかれてきたことである。

そして現在の音楽大学や教員養成機関における音楽においても、一般的に言って、単なる演奏技術獲得の傾向にあり、この演奏指向の教育からは基礎的応用能力の十分な養成はできていない。

ところで、幼児教育の現場では子供の精神的・身体的発達を助長する音楽教育がほどこされねばならないのであるが、現実に保育所・幼稚園においては「伴奏をやさしくして弾きたいのだがそのやり方がわからない。また、メロディーと伴奏が異っている場合で、初めて幼児に教える時にはメロディーも弾いてやりたいのだが、その場合にもどういふふうに伴奏を弾いたらよいかわからない。」との声があり、このことに代表されるように応用力の点で十分とはいえない。このように、メロディーに対する伴奏付けは現実に困難となっており、そしてそれは子供の音楽的な発達や楽しみを奪う結果になってしまっている。

それゆえ、子供に創造性を培う教育をするためには伴奏への固執を避け、基礎能力、及び応用力を養成し、簡単なハーモニー・音型によってメロディーを生かすことを最も早急にしなければならない。その結果として、伴奏付けに対する不安が去れば保育をスムーズに行うことがより可能になると思われる。

以上の観点から今回は伴奏付けに関して、幼児歌曲の基本的な伴奏形についてピアノの熟練度とのかかわりより、本学学生の基礎能力を把握し、今後の指導を考える上での一助としたい。

## II. 方法及び内容

①本学幼児教育学科の1・2年生全員についてアンケート調査をして、ピアノを弾くことに関す

る実態を把握する。調査の内容は次の通りである。

ピアノに関するアンケート調査	幼教年組番氏名
1. ピアノを最初に習い始めたのは次のうちのどの時期ですか。	
イ. 小学校入学以前	ロ. 小学校1～3年生
ハ. 小学校4～6年生	ニ. 中学校
ホ. 高校1～2年	ヘ. 高校3年
2. ピアノを最初に習い始めてから大学入学までずっと続けて習いましたか。	
イ. 続けて習った。	ロ. 1～2年中断した。
ハ. 3～4年中断した。	ニ. 5年以上中断した。
3. 大学入学以前にどのくらいピアノを習いましたか。	
イ. 先生に付いては全く習わなかった	
ロ. 3ヶ月未満習った	
ハ. 3ヶ月以上6ヶ月未満習った	
ニ. 6ヶ月以上1年未満習った	
ホ. 1年以上3年未満習った	
ヘ. 3年以上5年未満習った	
ト. 5年以上習った ( )年	
4. 現在ピアノの進度はどれですか。	
イ. バイエル	ロ. ブルグ1～12番
ハ. ブルグ13～25番	ニ. ソナチネ3ヶ楽章まで
ホ. ソナチネ4ヶ楽章以上	ヘ. ソナタ 小品
5. 自分の実力は4のイ～へのうちどれくらいだと思いますか。	
( )	
6. ピアノを弾くことをどう思いますか。(進度に関係なく)	
イ. とても好きで楽しい	ロ. 好きである
ハ. 好きでも嫌いでもない	ニ. 嫌いである
ホ. 苦痛なくらい嫌いである。	

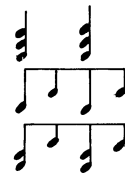
②①のアンケート調査をもとに、ピアノ進度別にグループ化し、各グループより平均的な学生を任意に選ぶ。この平均的とはⅢで述べるが、①の3・4・6より、ピアノを習った期間と進度とが比例しており、かつ、ピアノを弾くことが嫌いでない学生とし、43名選んだ。

③以上のようにして選んだ学生について実態を調査する。

- イ. チューリップ
- ロ. いちご
- ハ. うれしいひなまつり
- ニ. 歯をみがきましょう
- ホ. おかあさん
- ヘ. おしょうがつ
- ト. 北の国から
- チ. たなばたまつり
- リ. たんじょうび
- ヌ. どんぐりころころ

この10曲について各曲4種類ずつの伴奏形で弾いてもらい回答を得る。この10曲をとりあげたのは、いずれも津山市内の幼稚園・保育所でよく歌われており、また幼児歌曲をリズム・拍子・調子の面で分類した場合、各グループの代表となるものであること、それから調査する場合にこのくらいの曲数が資料として適当であると思われることによる。また4種類の伴奏形は、

- A……右手メロディー 左手は1小節に1～2の和音形
- B……右手メロディー 左手は分散和音形
- C……右手メロディー 左手は和音の分散形
- D……従来の楽譜の伴奏形



である。これは、伴奏の基本形として和音形・分散和音形・和音の分散形が考えられ、また、ピアノを習う上でこれらの形はごく初歩の段階に出てくるものであり、全員がすでに修得していること、それから、幼児歌曲の伴奏形として実際多く用いられていることによる。

調査は楽器の都合上、1 2年生に分けて実施し、1人1人がオルガンをもって、一斉に弾き、自分で回答を記入することにした。

質問内容・回答用紙及び楽譜例は次の通りである。

#### < 質問項目 >

1. それぞれ歌のメロディーを知っていますか。

- |   |   |
|---|---|
| $\left\{ \begin{array}{l} A. はい \\ \\ B. いいえ \end{array} \right.$ | $\left\{ \begin{array}{l} a. 何度も弾いている（両手で）。 \\ b. メロディーだけ弾いたことがある。 \\ c. 弾いたことはない。 \end{array} \right.$ |
|   |   |

2. 1曲につき4種類の伴奏がありますが(A～D)楽譜を見てやさしいと思うものから順に1, 2, 3, 4と番号をつけて下さい。

3. 次に、実際に弾いてみて下さい。(5分間)

① やさしいものから順に1, 2, 3, 4と番号を付けて下さい。

② 間違わないでわけなく弾けたものには◎を、止まったり間違ったりが3回以内のものは○を、4回以上つかえたものには×を、ときれときれで歌にならないものには××を、時間がなくて終りまで弾けなかったものには△をつけて下さい。

4. 4種類の伴奏の中で、歌にいちばん合っていると思われるのはどれですか。

(A・B・C・Dで答えて下さい。)

< 回答用紙 >

	例. こいのぼり				イ. チューリップ				ロ. いちご				ハ. うれしいひなまつり				
質1	A - a																
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
2	1	2	3	4													
3	①	1	2	3	4												
	②	◎	○	×	××												
4	A																

	ニ. 歯をみがきましょう				ホ. おかあさん				ヘ. おしょうがつ				ト. 北の国から				
質1																	
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
2																	
3	①																
	②																
4																	

	チ. たなばたまつり				リ. たんじょうび				ヌ. どんぐりころころ				
質1													
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
2													
3	①												
	②												
4													

( 氏名 )

イ. チューリップ

A

Musical score for section A, consisting of two systems of piano accompaniment. Each system has a treble and bass staff. The key signature is one flat (B-flat) and the time signature is 3/4. The melody in the treble staff consists of eighth and quarter notes. The bass staff provides a harmonic accompaniment with chords and some eighth-note patterns.

B

Musical score for section B, consisting of two systems of piano accompaniment. Each system has a treble and bass staff. The key signature is one flat (B-flat) and the time signature is 3/4. The melody in the treble staff is similar to section A. The bass staff features a more active accompaniment with eighth-note patterns.

C

Musical score for section C, consisting of two systems of piano accompaniment. Each system has a treble and bass staff. The key signature is one flat (B-flat) and the time signature is 3/4. The melody in the treble staff is similar to section A. The bass staff features a more active accompaniment with eighth-note patterns.



まず弾かなくても記入できる質問1・2を10曲とも書き、次にイをA→Dの順に1回だけ弾いて  
(テンポは自由) 回答し、5分毎に次の曲へ進めるというやり方をした。

### Ⅲ. 結果と考察

○アンケート調査の結果は次の通りである。

#### 1. ピアノ・オルガンを初めて習った時期について

これを進度との関係より人数で表わすと表1のようなになる。

表1

時 期 進 度	イ 小学校 入学前	ロ 小学校 1~3年	ハ 小学校 4~6年	ニ 中学校	ホ 高 校 1・2年	ヘ 高 校 3 年	記 入 な し	計
イ. バ イ エ ル	0	1	0	0	2	5		8
ロ. ブ ル グ 前 半	4	3	3	0	11	30		51
ハ. ブ ル グ 後 半	5	7	8	1	20	22	1	64
ニ. ソ ナ チ ネ 3ヶ楽章まで	5	19	9	1	23	22	1	80
ホ. ソ ナ チ ネ 4ヶ楽章以上	8	16	12	1	11	9	1	58
ヘ. ソ ナ タ 小 品	12	9	5	0	2	0		28
計	14	55	37	3	69	88	3	289

表1より縦の中央値をとりグラフにすると図1のようになり、習い始めた時期と進度との平均的な関係は時期が早いほど進度も高く、時期が遅くなるに従って進度も低くなることからわかる。また表1より、全体としてヘが最も多く、次にホであり高校になって習い始めた者が過半数を占めていることがわかる。

2. ピアノ中断期間を進度との関係より人数で表わすと表2のようになり、進度ニのクラスまでは続けて習った人が断然多いことがわかる。

図1

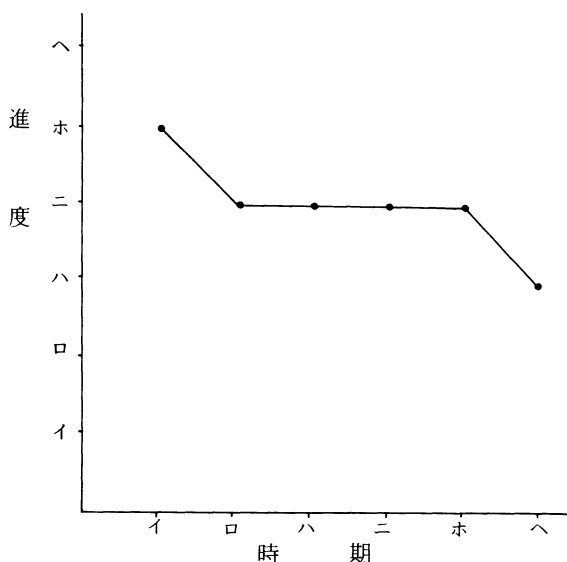


表2

	続けて 習った	1～2年 中 断	3～4年 中 断	5年以上 中 断	回答なし	計
イ	7	0	0	1	0	8
ロ	33	3	3	9	3	51
ハ	38	8	2	15	1	64
ニ	40	8	4	26	2	80
ホ	22	4	12	19	1	58
ヘ	8	4	9	7	0	28
計	148	27	30	77	7	289

### 3. ピアノを習った期間について

進度との関係より人数を表わすと表3のようになる。

表3.

期間 進度	イ 習って いない	ロ 3ヶ月 未満	ハ 3～ 6ヶ月	ニ 6ヶ月 ～1年	ホ 1～3年	ヘ 3～5年	ト 5年以上	回答なし	計
イ	2	1	1	3	1	0	0	0	8
ロ	4	4	8	18	16	1	0	0	51
ハ	1	6	11	15	27	4	0	0	64
ニ	3	2	4	19	34	9	8	1	80
ホ	1	0	6	6	16	15	13	1	58
ヘ	1	0	0	0	4	3	20	0	28
計	12	13	30	61	98	32	41	2	289

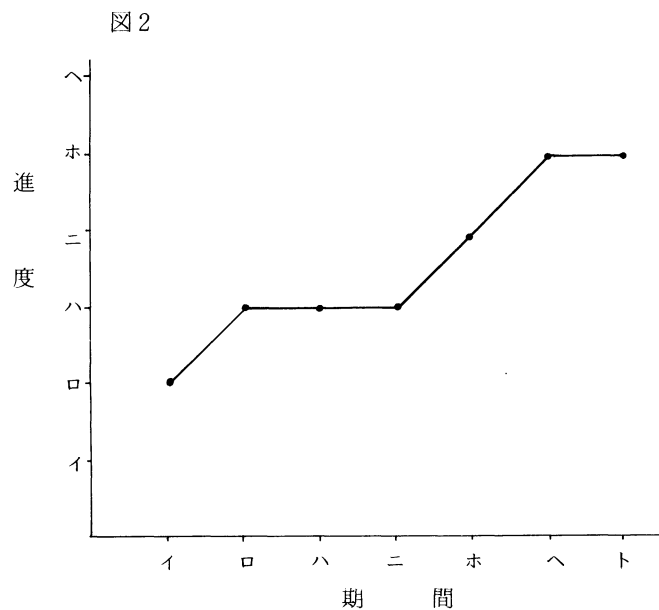


表3より、全体ではホ（1～3年）が最も多く次いでニ（6ヶ月～1年）であり、6ヶ月から3年の期間習った者が過半数となり、1の結果と一致している。

表3から縦の中央値をとってグラフを作ると図2のようになる。中央値が2つにまたがる場合は、人数の多い方を選んだ。

図2より、習った期間と進度は、ほぼ比例しており期間

が長くなるに従って、進度も高くなることがわかる。

### 4. 現在のピアノの進度について

1・2年に分けて人数及び百分率で出すと表4のようになる。

表4の百分率をグラフにすると図3のようになる。

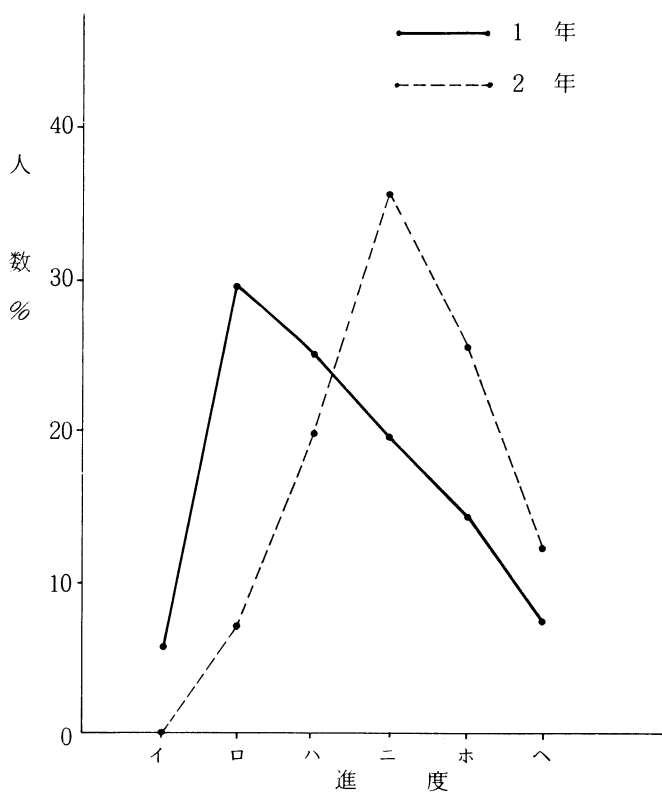


表 4

	イ バイエル	ロ ブルグ前半	ハ ブルグ後半	ニ ソナチネ 3 ヶ楽章まで	ホ ソナチネ 4 ヶ楽章以上	ヘ ソ ナ タ 品 小	計
1 年	8 ( 5.7)	41 (29.1)	35 (24.8)	27 (19.1)	20 (14.2)	10 ( 7.1)	141 (100) 人 %
2 年	0 ( 0)	10 ( 6.8)	29 (19.7)	53 (35.4)	38 (25.9)	18 (12.2)	148 (100)

( ) は百分率

図 3



グラフより、1・2年で  
進度上、大きな差があるこ  
とがわかる。

つまり、1年ではロが最  
も多く次いでハニホヘいと  
なっているのに対し、2年  
ではニが最も多く、次にホ  
ハヘロとなる。

これは、アンケートの回  
答 1. 2. 3. においては 1 年・  
2 年による大きな差はない  
ことから大学における 1 年  
間の差がこのような結果を  
生んだとってよいであろ  
う。

5. 自分の実力については、大多数が 4 の進度から 1 クラス下げており、進度にふさわしい実力  
だという自信のないことがうかがわれる。

6. ピアノを弾くことが好き嫌いかという質問に対して、進度との関係より人数を表にすると表  
5 のようになる。

表 5

好嫌度 進度	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	回答なし	計
イ	1	0	4	3	0		8
ロ	0	15	30	4	2		51
ハ	3	28	27	2	2	2	64
ニ	3	37	35	5	0		80
ホ	4	36	17	0	1		58
へ	7	17	3	1	0		28
計	18	133	116	15	5		289

イ……とても好きで楽しい      ロ……好きである      ハ……好きでも嫌いでもない  
 ニ……嫌いである                  ホ……苦痛なくらい嫌いである

図 4

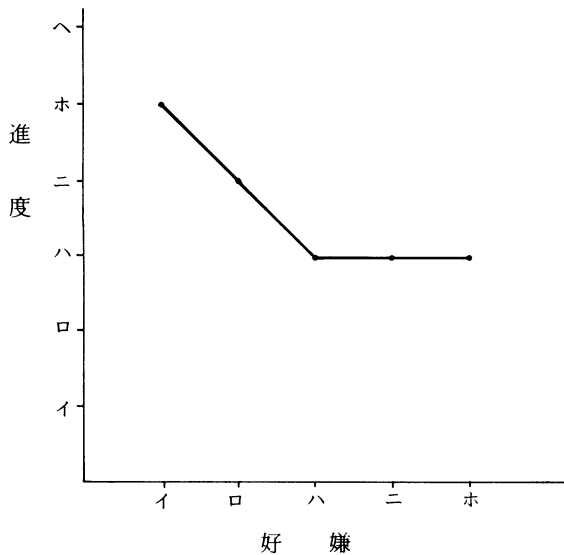


表 5 から90%以上の者がイ～ハであることがわかるが、ニ・ホの者が20名いることも考えねばならないことである。

縦の人数の中央値をとりグラフにすると図4のようになる。

図4より、ピアノを弾くことの好きな者は進度も高いことがわかる。

○実態調査の結果は次の通りである。

1 2年ほぼ同数で調べたわけだが、特に1・2年に分けて結果を出す必要のあると思われるもののみ別々に統計を出し、その他は一緒に出している。

•質問1については単に知っているかどうかを調べるのではなく、実際に弾く場合との関連を知るた

めなので3-②で述べる。

・質問2・質問3-①について、

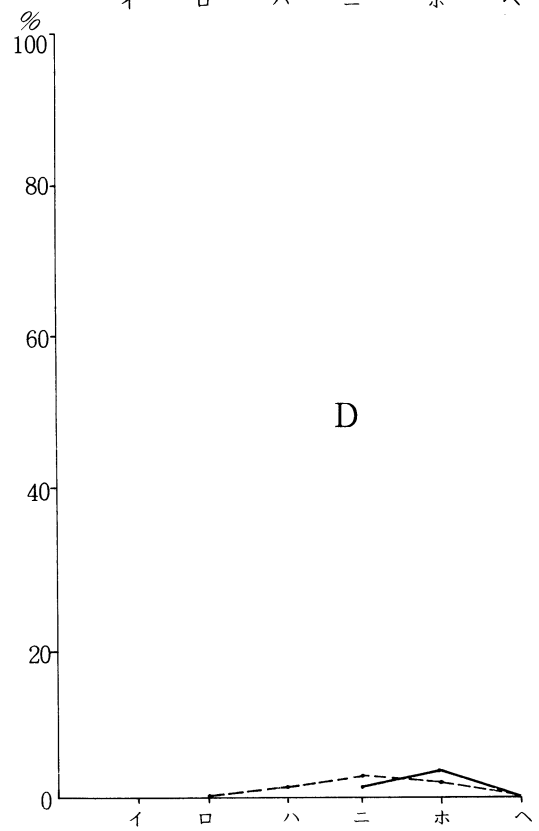
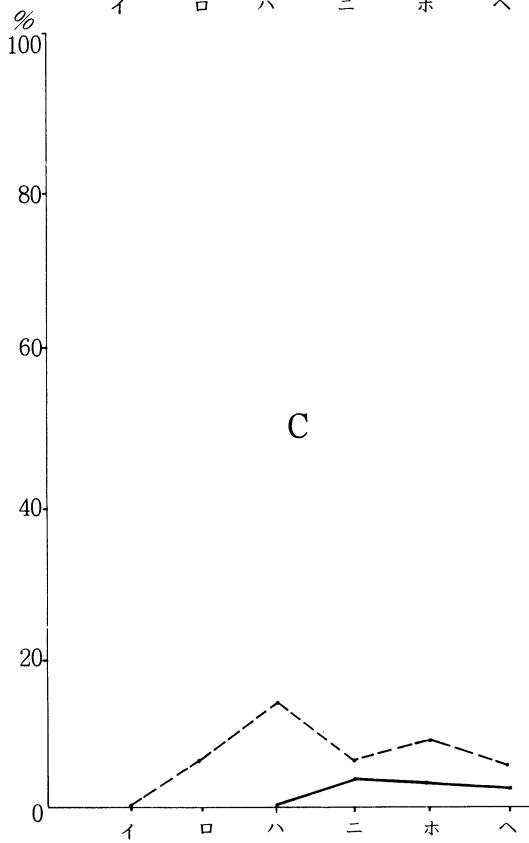
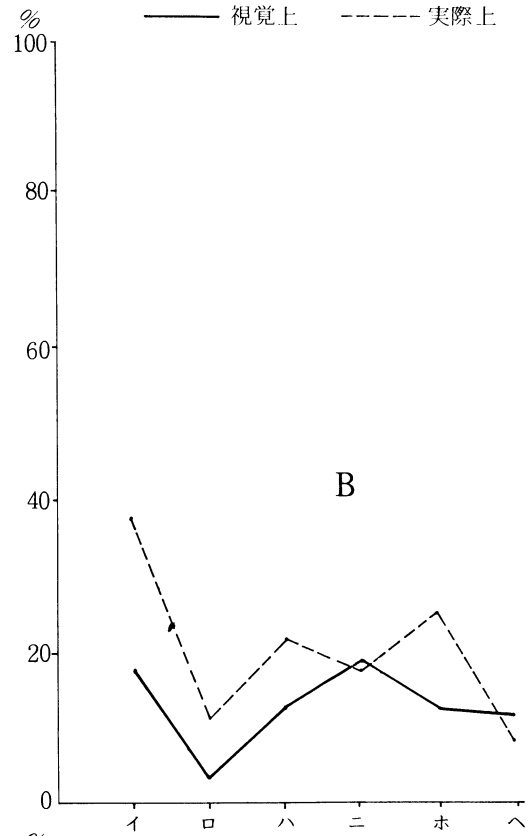
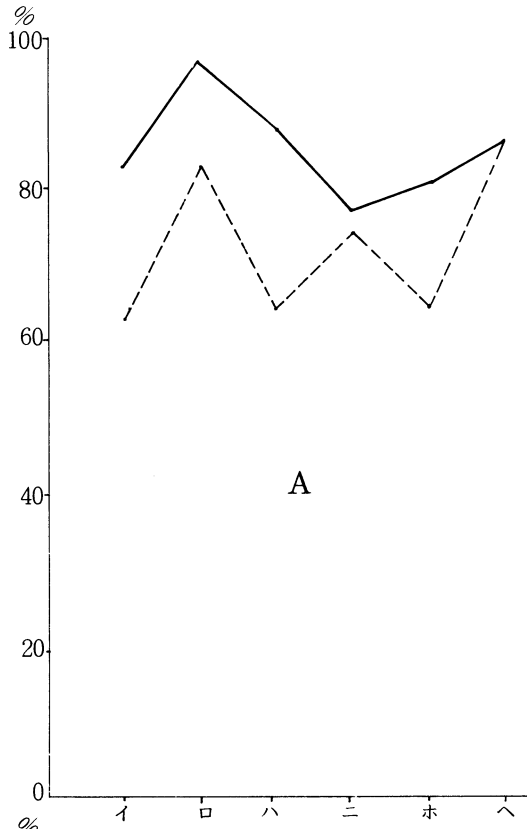
楽譜を見ただけで（以下視覚上という）と実際に弾いてみた場合（以下實際上という）とで、各曲のA～Dで1（いちばん弾きやすい）の数を合計すると表6のようになり、それをグラフで表わすと図5のようになる。

表6

	イ. バイエル		ロ. ブルグ前半		ハ. ブルグ後半	
	視覚上	實際上	視覚上	實際上	視覚上	實際上
A	33 ( 82.5)	25 ( 62.5)	76 ( 96.2)	65 ( 82.3)	70 ( 87.5)	51 ( 63.8)
B	7 ( 17.5)	15 ( 37.5)	3 ( 3.8)	9 ( 11.4)	10 ( 12.5)	17 ( 21.3)
C	0	0	0	5 ( 6.3)	0	11 ( 13.8)
D	0	0	0	0	0	1 ( 1.3)
	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)

ニ. ソナチネ 3ヶ楽章まで		ホ. ソナチネ 4ヶ楽章以上		ヘ. ソナタ・小品	
視覚上	實際上	視覚上	實際上	視覚上	實際上
61 ( 76.3)	59 ( 73.8)	64 ( 80.0)	51 ( 63.8)	60 ( 85.7)	60 ( 85.7)
15 ( 18.8)	14 ( 17.5)	10 ( 12.5)	20 ( 25.0)	8 ( 11.4)	6 ( 8.6)
3 ( 3.8)	5 ( 6.3)	3 ( 3.8)	7 ( 8.8)	2 ( 2.9)	4 ( 5.7)
1 ( 1.3)	2 ( 2.5)	3 ( 3.8)	2 ( 2.5)	0	0
( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)	( 100.0)

図5



これから、視覚上・実際上ともにA B C Dの順に1の数が多いことがわかり、一般的にあって和音形が最もやさしく、次いで分散和音形、和音の分散形という順序でやさしいといえる。Aについて見ると、視覚上76.3～96.2%が、実際上62.5～85.7%が、1の回答であり、B C Dの伴奏形よりは弾きやすい曲が圧倒的に多いことがわかる。しかし実際上の方が0～23.7%の幅で視覚上よりも1の比率が低くなっており、どういう場合にそうになっているか調べてみると（視覚上Aを1にしているが実際上A以外を1にしている場合を抜き出す）表7のようになる。そして、実際上B C Dのどれがいちばんやさしいかをみると表8のようになる。

表7

	イ (人)	ロ (人)	ハ (人)	ニ (人)	ホ (人)	ヘ (人)
うれしいひなまつり	1	2		1	1	2
お か あ さ ん	1	1	3	1	2	2
北 の 国 か ら	1	2	3		2	1
た な ば た ま つ り	1	1	4		3	
い ち ご	1	2	2	3	1	1
お しょうがつ	1	1	3	2	3	1
どんぐりころころ	1	1	2	1	2	
チュールリップ		1		1		
たんじょうび		1	2		1	
歯をみがきましょう			1		1	2

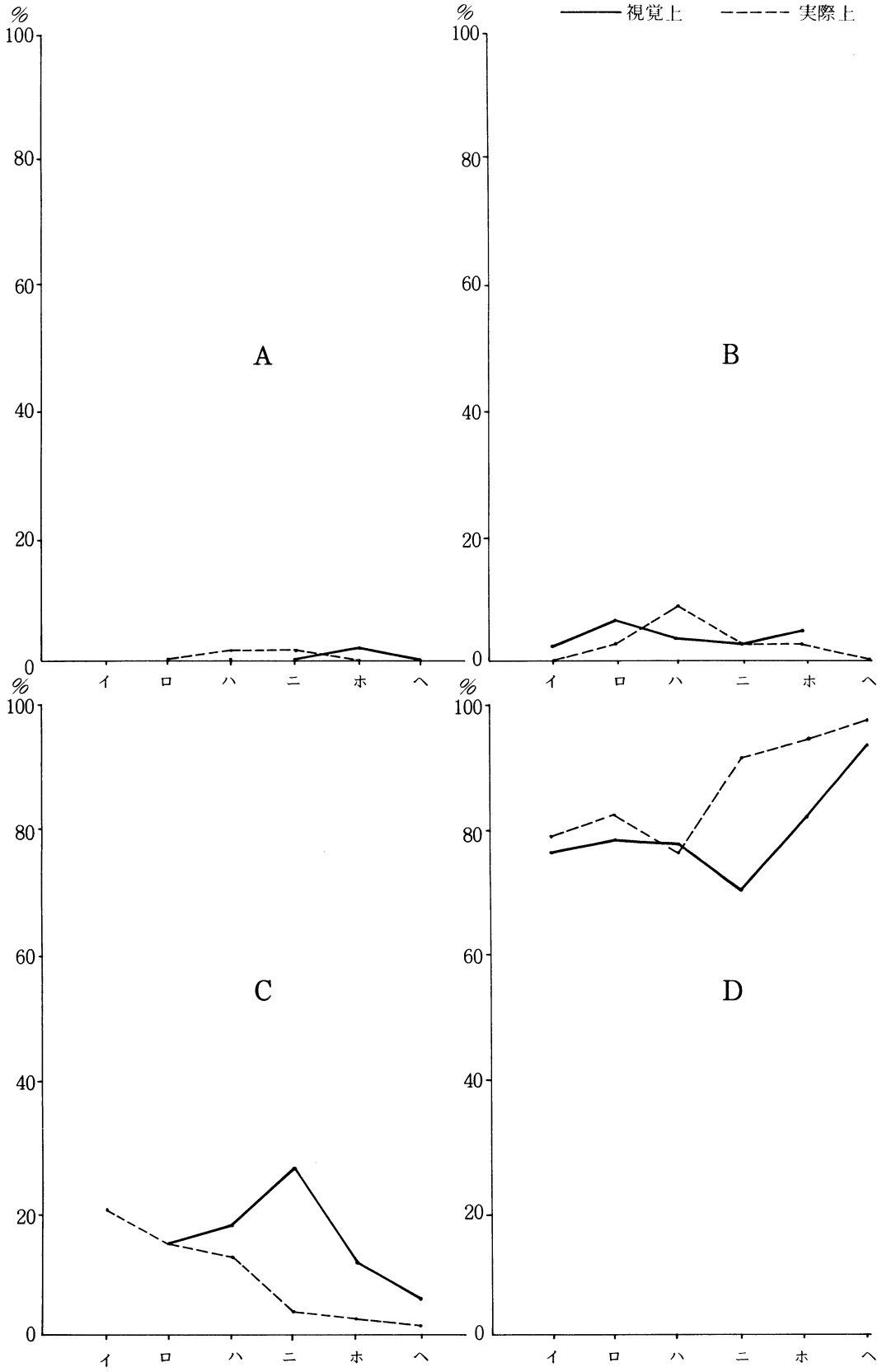
表8

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ
B	9 (100)	9 (75.0)	9 (45.0)	5 (55.6)	14 (77.8)	5 (55.6)
C	0	2 (16.7)	10 (50.0)	2 (22.2)	4 (22.2)	4 (44.4)
D	0	1 (8.3)	1 (5.0)	2 (22.2)	0	0

表7を見ると進度別で4つ以上にまたがっている曲が7曲もあり、また同一進度内では多数の曲に分散しており、曲別あるいは進度別による何らかの傾向というものは見られない。

それゆえ、これは各一回ずつ弾くということのためAよりもB、さらにCの方が右手の慣れが大きく、その結果左手に集中しやすくなり、実際上でB又はCがいちばんやさしいということになっ

図 6



たのだと思われる。

表8では進度ハを除けばすべてにおいてBが最も多く、次いでC・Dとなっており、図1と同じ傾向であることから、伴奏形としては、やはりBCDの順にやさしいといえる。

Bについては視覚上3.8～18.8%、実際上8.6～37.5%の幅で最もやさしいとなっている。

ソナチネ3ヶ楽章までとソナタのクラスではわずかながら逆になっているが、その他のクラスでは視覚上よりも実際上の方が、最もやさしいとする比率が高い。特にバイエルクラスでは、その差が20%と他より開きが大きく、このことは初歩の段階ほど弾きやすさと慣れとの関連が深いことを示しているといえよう。

また、逆にいちばんむずかしいものについて調べ（表6と同じやり方）グラフにしたものが、図6である。

図6から視覚上・実際上ともDCBAの順にむずかしく、Dが圧倒的にその比率の高いことがわかる。

以上のことから最もやさしい伴奏形はAで、最もむずかしいのはDであるといえるのであるが、その逆に最もやさしい形にDが、むずかしい形にAがあることも図1・図2よりわかる。これがどんな場合か調べると、

Aが最もむずかしい……………2例	}	うれしいひなまつり……………A Dは弾けずBCは弾ける。
		おしょうがつ……………Bは弾け、ACDは弾けない。
Dが最もやさしい……………5例	}	おかあさん……………ABC Dとも弾けない。
		いちご・おしょうがつ……………AD弾け、BC弾けない。
		いちご・歯をみがきましょう……………ABC Dとも弾ける。

となり、Aだけが弾けなかったり、Dだけが弾けたりしたのではない。それゆえ心理的なものが作用したものと考えられる。

#### ・質問3-②について

実際に弾いてみて○と◎（間違いなどが3回以内）を「弾ける」とし、×と××（4回以上つかえたもの）を「弾けない」とし、また、A-aを「知っている曲」、BとA-b、A-cを「知らない曲」とし、1・2年別に進度毎に調べると表9のようになる。

表9より弾ける曲について、全曲の中での比率をグラフにしたのが図7、知っている曲、あるいは知らない曲の中での比率をグラフにしたのが図8である。

表 9

進 度	弾 け る 曲			弾けない曲 全 曲 中	時間 が な く て 弾 い て い な い 曲	曲 数			
	全 曲 中	知 っ て い る 曲 中	知 ら な い 曲 中			全 曲	知 っ て い る 曲	知 ら な い 曲	
一 年 生	イ	44(27.5)	29(34.5)	15(21.1)	104(65.0)	12( 7.5)	160(100)	84(100)	76(100)
	ロ	49(24.5)	36(39.1)	13(12.0)	129(64.5)	22(11.0)	200(100)	92(100)	108(100)
	ハ	77(48.1)	39(54.2)	34(40.5)	79(49.4)	4( 2.5)	160(100)	72(100)	84(100)
	ニ	63(39.4)	48(57.1)	15(19.7)	93(58.1)	4( 2.5)	160(100)	84(100)	76(100)
	ホ	127(79.4)	92(79.3)	35(79.5)	33(20.6)	0	160(100)	116(100)	44(100)
	ヘ	108(90.0)	62(91.2)	46(88.5)	12(10.0)	0	120(100)	68(100)	52(100)
二 年 生	ロ	62(51.7)	49(55.7)	13(40.6)	53(44.2)	5( 4.2)	120(100)	88(100)	32(100)
	ハ	80(50.0)	61(56.5)	19(36.5)	79(49.4)	1( 0.4)	160(100)	108(100)	52(100)
	ニ	67(41.9)	50(43.1)	17(38.6)	93(58.1)	0	160(100)	116(100)	44(100)
	ホ	124(77.5)	80(74.1)	44(84.6)	36(22.5)	0	160(100)	108(100)	52(100)
	ヘ	142(88.8)	98(87.5)	44(91.7)	18(11.3)	0	160(100)	112(100)	48(100)

( )は百分率

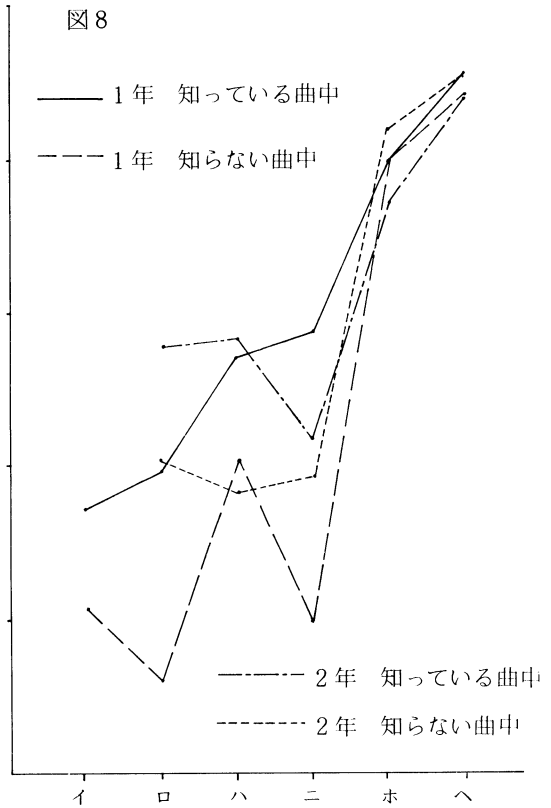
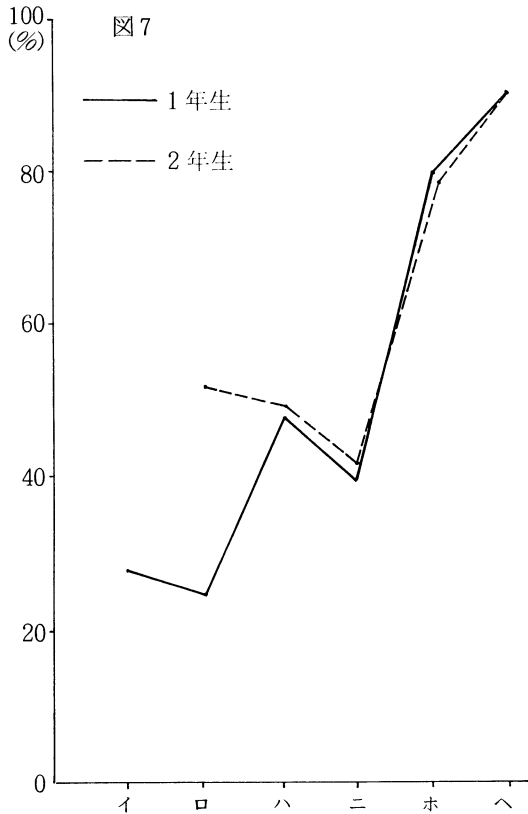




図7より1・2年とも全体的傾向としては、進度に比例して弾ける率も高くなっており、特にホにおいては急激な上昇がみられる。しかし、2年生ロハニでは進度に逆行して下降がみられ、これは考えなければならない問題といえよう。またロにおいて1・2年の差が大きく、2年生の方がよく弾けるのは幼児歌曲の伴奏に対する慣れの度合いが大きいからではないかと思われる。それゆえ、初歩の段階では経験を多くして幼児歌曲に慣れておくことが必要といえよう。

図8からは1・2年とも知らない曲よりも知っている曲の方がよく弾け、また進度との関係においても知っている曲の方が比例傾向が強いことがわかる。

以上のことから、 表 10

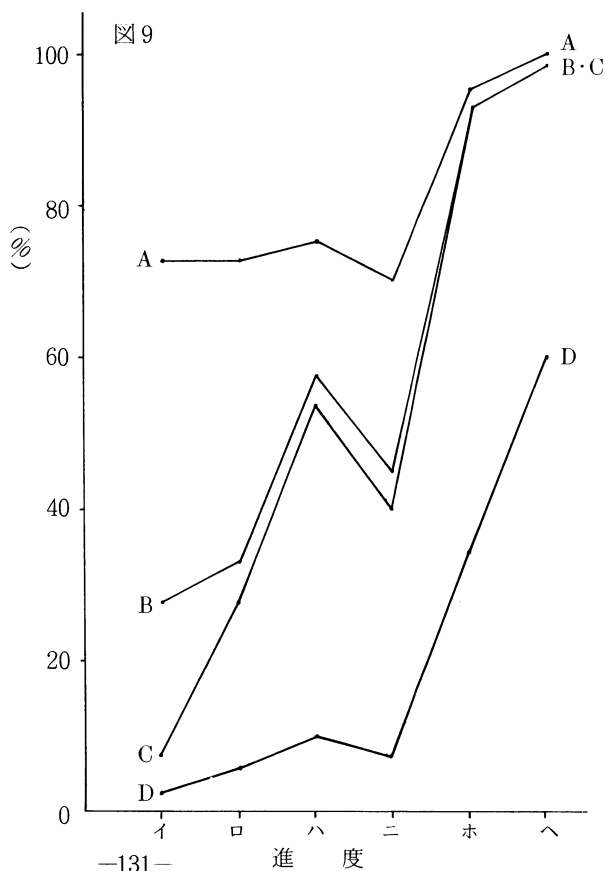
特に初歩の段階においては幼児歌曲を知っていること、伴奏に慣れていること、が弾ける要素になっているので数多くの

	イ (各40曲中)	ロ (各80曲中)	ハ (各80曲中)	ニ (各80曲中)	ホ (各80曲中)	ヘ (各70曲中)
A	29(72.5)	58(72.5)	60(75.0)	56(70.0)	76(95.0)	60(100)
B	11(27.5)	26(32.5)	46(57.5)	36(45.0)	74(92.5)	79(98.6)
C	3( 7.5)	22(27.5)	43(53.8)	32(40.0)	74(92.5)	79(98.6)
D	1( 2.5)	5( 6.3)	8(10.0)	6( 7.5)	27(33.8)	42(60.0)

曲を経験することが大切である。

次に伴奏形の種類別に弾ける割合を調べてみると表10のようになりそれをグラフにしたのが図9である。

図9より進度がどのクラスともA B C Dの順に弾ける率が高く、Aは70%以上の曲が弾けているのに対し、Dは進度ニまでは10%以下と低いことがわかる。またB Cでは進度に比例して弾ける率も高くなっているが、弾けるクラスと弾けないクラスの差が大きく、分散和音形及び和音の分散形が技術上の問題ともより関係あると思わ



れる。

また進度ロハニではAの形がイと同じくらいしか弾けておらず、図7・8においても停滞していることから、これらのクラスでは基礎的な理解の点で問題があるのではないかとと思われる。

• 質問4について

1曲ずつA～Dに分けて結果を出したところ同一進度内においては、曲別による大きな差が認められないので、10曲をひとまとめして進度別にするると表11のようになった。

表 11

	イ バイエル	ロ ブルグ前半	ハ ブルグ後半	ニ ソナチネ3 ヶ楽章まで	ホ ソナチネ4 ヶ楽章以上	ヘ ソ ナ タ 品
A	19 (47.5)	14 (17.5)	11 (13.8)	9 (11.3)	5 ( 6.3)	9 (12.9)
B	18 (45.0)	23 (28.8)	26 (32.5)	24 (30.0)	20 (25.0)	21 (30.0)
C	2 ( 5.0)	25 (31.3)	27 (33.8)	33 (41.3)	33 (41.3)	18 (25.7)
D	1 ( 2.5)	18 (22.5)	16 (20.0)	14 (17.5)	22 (27.5)	22 (31.4)
計	40 (100)	80 (100)	80 (100)	80 (100)	80 (100)	70 (100)

表 11 より進度別に、A～Dが占めている割合をグラフにすると図 10 のようになる。

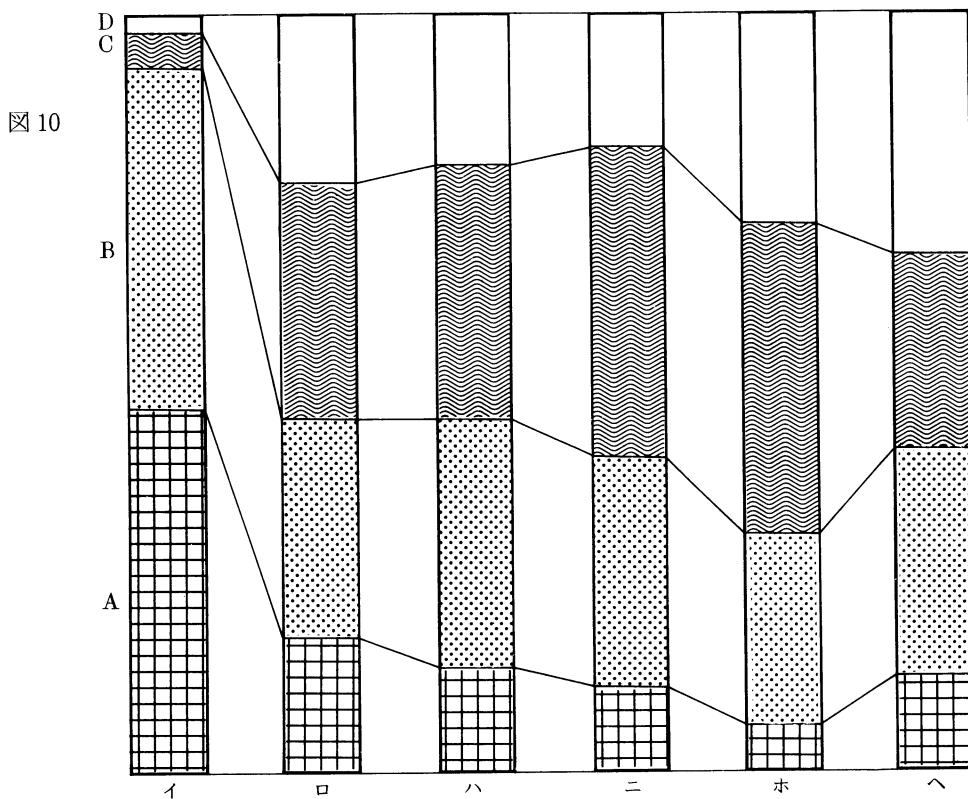


図10より大まかな傾向として進度がイ → へに進むに従って、伴奏形も A → D になることがわかる。これは図7において、進度と弾ける率とが比例しているのと同じ傾向にあり、自分の弾ける伴奏形が即ちその曲に似合った伴奏形であるとする場合の多いことを示している。

このことは、いくら音楽的にすぐれた伴奏形であってもそれを弾きこなせない場合には、無理をして弾くよりもやさしい伴奏形を用いる方がよいということにつながり、また、そのことが音楽を楽しむことにもなると思われる。

#### IV. ま と め

幼児歌曲の伴奏が弾けるかどうかはピアノの進度と密接な関係にある。しかし、特に初歩の段階においては伴奏に対する「慣れ」が大きく影響し、その度合いが大きいほどよく弾けることがわかる。また技術（進度）と共に、音楽基礎能力にも関係があり、両方の力がなければ簡単な応用もできない。

それゆえ、2年間という短期間で実力をつけるためには幼児歌曲を多く知り、さらに伴奏に慣れること、つまり幅広い経験をもち、テクニックにこだわり過ぎないことが重要であるといえよう。また、音楽を楽しむ余裕のある伴奏ができるよう、簡単な和音付けなど応用力を養うためには基礎能力の充実も必要である。

今回の実態調査研究においては和音付けという観点から取り組んだために、わらべうたの類に属するものは除外した。

また、調査方法において必ずしも客観的な結果を得るやり方ではない面もあるのだが、これは音楽の性質上、人間の心理と切り離せないこともあり、単なる客観性が要求されるものでもない。その客観性と主観性ということはこれからの研究方法において大きな課題となり得るであろう。

今回、伴奏に対する進度別のおおよその傾向及び能力が把握できたが、個々の結果について深く追求していくことはしていないので、それは今後の課題とし、あわせて、この結果をもとに個人の能力・曲に応じた伴奏を考え、音楽全般の指導方法を考えて、保育者自らが音楽を楽しみ、その上幼児の教育上にも有効であるような教育を考えていきたい。

#### 参 考 文 献

- 岡本 仁 「幼児教育における実用伴奏法」 全音楽譜出版社  
諸井三郎・酒田富治 「保育のための音楽教育」 厚生閣版 昭和45年  
筧 三智子 「子どもの発達と音楽」 音楽之友社 昭和52年

- J. L. マーセル・美田節子訳 「音楽教育と人間形成」 音楽之友社 昭和42年
- 佐瀬 仁 「音楽心理学」 音楽之友社 昭和51年
- 岡山県国公立幼稚園教育研究会・音楽リズム部会・教育芸術社編 「幼稚園指導資料」
- 増子とし 「音楽カリキュラム」春・夏・秋・冬 フレーベル館 昭和52年
- 山本道子編 「幼児歌曲集」Ⅰ・Ⅱ 音楽教育社 昭和51年
- 河井富美恵監修 「創造の音楽リズム」 科学書院 昭和53年
- 庄司武夫・重田恒雄・佐藤玲編集 「幼児保育のための歌と音楽遊び」上・下 圭文社 昭和53年